

## 岡山孤児院新報の解読

### —岡山孤児院による対外発信—

マスカットユニオン 片山 貴夫 (4785)

キーワード:岡山孤児院新報、石井十次、執筆

#### 1. 研究目的

先行研究として室田保夫教授による『近代日本の光と影』(関西学院大学出版会)第2章などが存在する。岡山孤児院が社会にむけて発信していたメディアであった『岡山孤児院新報』(以下『新報』と表記)に対する石井十次の関与の詳細について調査した。

#### 2. 研究の視点および方法

- 1) 石井十次執筆のものである記事を他資料から特定する。
- 2) 石井十次が編集に関与していた記録を調査する。
- 3) 『石井十次日誌』などとの対応関係を調査する。

#### 3. 倫理的配慮

- 1) 社会事業施設に保護されていた人間の実名については原則として苗字のみを表記する。
- 2) 社会事業施設に保護されていた人間の人物像については誹謗中傷になりうる表現を可能な限り避ける。
- 3) も 2 について、直接の血縁者から要請がきた場合には可能な限り修正する。筆者と見解を異にする場合においても、最低限「併記」とする。
- 4) 1, 2, 3については、先行研究による論文の引用であることを理由に例外を設けない。
- 5) 史料中の現代では不適切と考えられる表現については「原文ママ」と記す。

#### 4. 研究結果

『新報』創刊の1896(明治29)年は岡山孤児院が創立から10年目を迎えた年であり、監獄伝道に従事していた石井の協力者・渡辺亀吉が同年5月11日に永眠している。その前年(1895)年は、石井品子夫人の逝去、石井自身も感染した院内コレラの発生があった。石井は、『日誌』(1896年6月23日)によると「ペテー師を訪ひ「孤児院新報」発行のことにつき相談」をしたうえで「院役者の相談会」をしている。このとき渡辺栄太郎が「主筆」と決められたらしい(石井は渡辺を「編輯主任者」にする意向であった)。

創刊時の編集体制:左は孤児院での役職—『新報』第18号(1898年2月28日)より

発行人:河本茂四朗

機業部主任

編集人:渡辺栄太郎

教育部主任

印刷人:小野田鉄弥

女子部主任、外部書記、活版部校生、夜学部教授

『新報』の定期的な発行体制それ自体は、石井の数多い院外出張に影響は受けていなかったようである。一方で、石井の孤児院運営方針の変化による影響は推測が可能である(「茶臼原」についての言及)。『新報』に複数掲載されている「埤原子」は、石井による執筆(『日誌』1896年2月10

日)の記事である。『新報』13号の「社説 天下に謝し且つ訴ふ」は石井十次の執筆(設立時について「吾人は是れ無力の一貧生のみ」と述懐)。編集会議のようなことを行っていた(『日誌』1900年1月13日)ことをうかがわせる記録は少ない。「岡山孤児院新報一万部発行につき感謝祈祷会」もしている(『日誌』1899年5月26日)。小野田鉄弥の渡米(1908年)の翌年に『新報』は廃刊になっている。外部に寄付を募るために『新報』活用している。例えば、宮崎「県庁横山良定に岡山孤児院新報等を渡し寄付を募」っている(『日誌』1897年12月24日)。

『岡山孤児院新報』第4号(1896(明治29)年10月23日)の社説では、アメリカ鉄道組合の指導者であったユージン・デブスが、「一大偉人」として紹介され、同14号(1897(明治30)年10月30日)の社説では労働者のアルコールの害を述べている。『新報』第7号(1897(明治30)年1月21日)の社説「社会主義の潜勢」では「若し國民の道義心と胆勇とにして社会主義か要求する處を満たす能はずんは、社会主義は必ず起らざる可らず」と述べている一方で、自らの社会事業の目的を「社会主義の代務」と位置づけている。『新報』には安部磯雄が翻訳したエドワード・ベラミーのユートピア小説の「回顧」(岩波書店版では『顧みれば』)が連載されている(『新報』では一部のみが翻訳)が、こうした「社会主義」にも及ぶ問題意識は、『新報』初期においてはさほど特別なことではなかったようである。当時の「社会主義」新聞においても一部で岡山孤児院が言及されているように、石井自身も関心をもっていたし交流関係もあった。初期においては「世の光、地の塩」としての信徒集団の自意識が強くあったものと思われる。当時緊張関係があった、キリスト教と「国体」との関係を反映し、「国体」とキリスト教の間には矛盾が無いという弁明につとめる記事「論説 日本国体と教育勅語に対するキリスト教の教義」(8号)もある。『新報』創刊号の「社告」で「孤児貧民の救済および教育にかかわるご意見なるべく御寄稿くだされたく候」と言っているように、社会に向けての一方通行的な発信ではなく、岡山孤児院の側も必要な事柄を自分たち以外から広く吸収しようという姿勢がある。処遇方法について当初さまざまな新方法を試み試行錯誤していることを社会に向けて明らかにする一方で、岡山孤児院要則を掲げ自らの社会的認知に努めている。社会的に認知されたのちはマニュアル化されたものを「岡山孤児院問答」として宣伝している。

## 5. 考察

- 1) (「石井」署名ではない)石井十次執筆のものであると明確に特定可能な記事が存在する。
- 2) 石井十次が編集に関与していた記録は存在するが多くない。
- 3) 『石井十次日誌』との対応関係については幾分かの程度で判断されうる。

部外者、石井以外の人間が言及しているのに『新報』や『日誌』には言及が無い情報(ニコライ主教が日記で言及している、ロシア系「孤児」を彼に引き渡した経緯など)もあり、『新報』などの対外向けメディアの記事として採用、公表されている事柄と、そうではなかった事柄との関係性—その選択にどのような背景が存在がしたのかについてさらなる調査が望まれる。